

投句欄 自由律の泉 ⑦

- 1 今年はいいぜろにいぜろ来年はいいぜろにいワン?
檜 幽可
- 2 コロコロと細く山水は涸れない
大岳次郎
- 3 蓬草妣ははの背中の匂いして
植田鬼灯
- 4 五月雨さみだれあか明るくする新緑しんりよくの並木道なみきみち
アカホリフキ
- 5 心臓こころの至近距離に愛が刻んだ弾痕
久光良一
- 6 陽炎かげろうの繁栄をコロナが呑み込んで行く
金澤ひろあき
- 7 真夜中の卵ふくらむ卯月
野谷真治
- 8 苛立つ心を和ますうぐいすのつぶやき
無一
- 9 轟々と風鳴る熔岩の大地に暝る土壇の膨み
小山榮康
- 10 ずっと午前3時の街角にいる
吉本知裕
- 11 クラスタ発生！春が急ブレーキー!!
和崎はると
- 12 眠るまでの時間を通りすぎていった人達
黒瀬文子
- 13 満開の花の花枝お手をどうぞ
佐瀬広隆
- 14 食い違いに沈黙を選ぶ
部屋慈音
- 15 みんな重くなりメガネはずして今日を見る
富永鳩山
- 16 おととしの素麺ゆでてる自粛の春
富永順子
- 17 「ハックション」みんな逃げてしまう昼月
ちばつゆこ
- 18 句会のじかん笑い声も自由律
佐川智英実
- 19 送って出て外灯あなたの影の匂い
荻島架人
- 20 コロナ騒ぎ葦の髄から世間見る
平岡久美子
- 21 抽斗の奥の昭和も遠くなる
棚橋麗未
- 22 階段ふたつ飛ばしあれば初夏の太陽
さいとうこう
- 23 早朝のバス停ハトまで集ってコロナ談義
白松いちろう
- 24 透明な殺意 全部中止
井尾良子
- 25 三島由紀夫を鑑た 時代に震えた
大出匡

● 泉 ⑥より 一句鑑賞

思いがけず旅が始まる写真の断捨離 白松いちろう

▼私は断捨離が下手だ。整理しようとするものの、つい手にとつて思い出にふけてしまう。写真などは特にそうだ。写っている物に、時を忘れて心遊ばせてしまう。これは自由律を読んでいる時も同じなのだろうな。(金澤ひろあき)

▼断捨離する写真に、過去への旅が始まる…若い日の懐かしい、あの日々。(ちばつゆこ)

草の中にタンポポの灯を探す春の夕 アカホリフキ

▼昔、吉祥寺のライブハウスぐわらん堂に集まったミュージシャン(高田渡、シバなど)で結成された、武蔵野タンポポ団を思う。タンポポの灯がいい。(野谷真治)

▼作中の「タンポポの灯」が良いなと思いました。「灯」は、花。「夕」は、夕方。私の周囲でも、ごく普通に「タンポポ」が咲いております。(無 一)

振りかえるたびに眩しくなる枯野

棚橋麗未

▼ふりかえって見えるものは過去である。年を重ねるにつれて、未来がだんだん小さく暗くなり、過去の方が輝いて見え始めるものである。眩しい過去を持っている人は、しあわせな人生を送ることのできた人であろう。(久光良一)

草だんご買う君を信号が待つてる さいとうこう

▼この句に惹かれたのは句切れを何処にするかと云うことである。「草だんご買う」で切ると草団子を買うのは詠み手。「草だんご買う君を」で切ると、買うのは君となる。

(檜 幽可)

▼子どもの買物を見守っているのでしょうか。自分の子どもが小さかったころを思い出しました。日常が日常でなくなっている今日、写真のように断片を記しておく感性はそのままにしたいと思います。(大出匡)

はこべの花芽ここにも春

佐瀬広隆

▼はこべの花はとても小さい。まして花芽であればもっと小さい。ちよつと気づきにくい。それを見つけて、素直に「ここにも春」と表現したところに、作者の誠実さを見い出します。心があたたまる一句です。自然です。(大岳次郎)

鮮やかに緑が芽吹く

田中美太

▼「緑が芽吹く」という表現から、新緑の季節を想像します。「鮮やかに」という言葉で、芽吹き緑の明るい、はつきりとした様子が目に浮かびます。読んで気持ちが爽快になりました。(アカホリフキ)

河原の小石と話して今日が終わる

富永鳩山

▼昨年老妻を亡くした私にとっては身につまされる句です。朝夕変らぬ遺影は今も微笑を唇にたたえています。

(小山榮康)

言い訳はやめとくすこし塩味の桜餅

ちばつゆこ

▼桜餅を食べた時の感想と「言い訳はやめておく」という自分の思いが一緒になってる所がとても面白く感じました。無関係な2つの事がからまってくる事はよくあると思います。

(吉本知裕)

白髪に晴れ着させかえて想う人

亀山英翔

▼若白髪だったので、家内の染め残りで染めていきましたが、頭皮がかぶれだったので止めて何年にもなりません。白にはどんな色も合うと言われ、自信をもって髪はシルバーですが元気に頑張っております。

(和崎はると)

春を引き返す雨に猫は三本足

富永順子

▼早春の雨は冷たく、冬へ遡る時もある。そんな時に雨が大嫌いな猫が少しでも濡れないようにと交互に片足を上げている。可愛らしい猫の様子とそれを見詰める作者の優しさが覗える。

(白松いちろう)

晩鐘の中で さくら満開

平岡久美子

▼鐘の音の流れる時間と満開の桜というシンクロがすぐにも一枚の絵になりそうな情景が目につかぶ。作者はきつとアドレナリンが湧き出るような幸福感に包まれていたにちがいない。

(部屋慈音)

コミュニケーションは食べ物 大きくなる

大岳次郎

▼コロナウィルスで元気のもだったお友達や孫とも会えず鬱状態になりそう、あらためて人と会話したり揺れたり

することが人を成長させるかわかった気がします。いつものように早く自由に出歩くことが出来ますように。

(井尾良子)

枯れた梅に花が一輪 俺ももう一度

高村昌慶

▼今年の花はもう終わりだとちよっぴり寂しく思っていたら、ある日色鮮やかに咲く花を見ると、大げさでもなく寿命が延びた気がする。まだまだです。

(平岡久美子)

● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

へ送り先へ 〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子

メール kumiko801@wh-wing.net

へ締め切りへ 2020年7月末日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、自由律俳句協会の公式ツイッターでも紹介させていただきます。ツイッターでの紹介を希望されない方は、投句の際にその旨をお知らせください(投句用紙にチェック欄があります)。

自由律俳句協会 Twitter からのご報告

◆「自由律俳句ウィーク」開催しました

外出自粛の中で迎えた2020年のゴールデンウィーク、5月1日から6日にかけて、オンラインイベント「自由律俳句ウィーク」を開催しました。期間を2日毎に区切り、Twitter上で合計3つのテーマ(「扉」、「音」、「旅」)について句を募集しました。これまでの自由律俳句には見られないタイプの句も多く寄せられ、現代自由律俳句の一端を垣間見ることができたと思います。「#(ハッシュタグ)」をつけてテーマに沿った句をツイートすることで投句とさせていただきますが、短い期間にもかかわらず100名を超える方にご参加いただきました。多くの会員の皆様にもご参加いただき、この場を借りて御礼申し上げます。

投稿日時	投稿内容	ユーザー名
5月1日	自由律という大空 ちーちゃん	ちーちゃん
5月2日	五月の風罪を揺さぶる音 ゆきこ	ゆきこ
5月3日	改札機に吸い込まれた地元の名前 藤井雪兔	藤井雪兔
5月4日	思い出は山の向こうの山に青空 田中美太	田中美太

ネットプリントで配布した投句一覧

特筆すべき点は、参加者の多くが結社などに属さない、いわゆる無所属の方たちだったことです。SNS等を通じて個人が自由に句を発表できる環境が整っている現代において、結社を中心としたこれまでの俳壇構造は大きな岐路に立っているのかもしれない。結社に属さず自由な活動を展開する自由律俳句愛好家の皆さんをまとめ、大きなムーブメントにしていくことが自由律俳句協会の大きな使命の一つだと改めて感じました。

一方で、全国の結社を横断的に繋ぎ、各結社の魅力を伝えていくことも、このような時代だからこそ大切だと思うのです。

すべては自由律俳句の裾野を広げるため、これからも協会は邁進していく所存です。

皆様、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

◆「自由律俳句ウィーク」に投稿いただいた句をいくつか紹介します。

テーマ「扉」 空への扉 自由律という大空 ちーちゃん

テーマ「音」 五月の風罪を揺さぶる音 ゆきこ

テーマ「旅」 改札機に吸い込まれた地元の名前 藤井雪兔

思い出は山の向こうの山に青空 田中美太

(さいとう こう)



自由律俳句協会@jihai-kyo